

～聖霊降臨（5月24日）の祝日を機に  
乗じて～



風（聖霊）が吹くと青空が見える

\* 2000年（大聖年）3月12日—教会の歴史の中できつとその日が末永く残るでしょう。その日に故教皇聖ヨハネパウロ2世はローマ・カトリック教会の歴史の新しいページを開いたからです。史上初めて、ローマ・カトリック教会の最高の責任者は、神に向かってそして全人類に向かってへりくだって、過去においてキリスト者が個人的に、さらに組織としての教会が犯した罪や過ちの赦しを願いました。

—1994年11月10日の「紀元2000年の到来」という「使徒的書簡」の中で、故教皇聖ヨハネ・パウロ2世は次のことを書いています。（第4章33号～36号）「…教会がその子らの罪深さをより深く認識し、歴史の中で彼らがキリスト者の精神とキリストの福音から遠ざかり、世界に向かって信仰の価値に導かれた生活の証言をするかわ

りに、信仰の反対証言とつまづきとなった考え方や行動にふけた全ての時代を思い起こすことは適切なことです」と。

それを踏まえて—バチカンの中の多くの反対を振り切り—教皇は、大聖年（2000年）の四旬節を契機に、「記憶と和解、教会と過去の過ち」という公式文書を発表し、「赦しを願うミサ」をささげることとを決定しました。—そのミサは2000年3月12日にローマで行われました。そのミサの間に共同祈願の形で、教皇は7つに類別された赦しの願いを神と全人類に向かって述べました。

(1) 一般的な行い (2) 真理のための行為（宗教裁判・火刑など） (3) 教会分裂について (4) ユダヤの民に対して (5) 愛と平和、文化の尊重について (6) 女性と少数派の人々に対して (7) 人権について —の過ちに対するものでした。—その時に、「今さら」と思った人も、「それに触れるべきじゃなかった」と思った人も少なくなかったようですが、福音に基づいた正直な反省を全世界の人々の耳と目

（マイクとカメラを通じて）の前で行った教会、謙虚に行動し、自分の過ちと罪を勇気をもって認め、さらけ出した教会に対して私は感銘を覚え、誇りや厚い感謝と信頼の心を抱いたことをよく記憶

しています。その教会は、キリストの共同体として本来の姿をよく表してくれたものだとして今でも素直に喜んでいきます。

\*2014年12月22日—ローマ教皇庁への  
降誕祭の挨拶の中で教皇フランシスコは  
バチカンの官僚組織の15の病気を指摘  
し、苦言を呈しました。(1)不減な者、必要  
不可欠な者の病気(自己批判をせず、変化  
に適応しない) (2)仕事に没頭するた  
めにイエスの足元にかがんで「良い方」を  
選ぶことを忘れていている者の病気 (3)心  
と精神が「石のようになる」者の病気(人間  
らしさを失う) (4)計画しすぎ、機能  
主義という病気 (5)協調性の欠如と  
いう病気(縦割り主義) (6)霊的なア  
ルツハイマー病(初心を忘れる) (7)  
競争と虚栄心という病気(外観、衣服の色、  
肩書が人生の目的になる) (8)実存的な  
とうごうしつちようしやう (9)信者との交流  
を忘れる) (9)うわさ話、苦情、陰口  
という病気 (10)上司を偶像崇拜する  
病気(出世主義) (11)他の人々に対し  
て無関心であるという病気 (12)陰うつ  
な顔という病気 (13)物を  
ため込む病気(物質  
主義) (14)閉鎖的  
な集団意識という  
病気(内向き志向)  
(15)自己顕示とい  
う形で行われる  
世俗的な利益を求め  
る病気(自己顕示欲)



—このような痛烈な批判に対して抵抗を  
感じた、そして今も感じる人は少なくあり  
ません。自分に当てはまることだと分かっ  
ている人にとってなおさら嬉しくない話

です。教会の布を暴くには何の得がある  
かと思う人もいるでしょう。

\*しかし、その抵抗は何かの—見え隠れす  
る怖いものものしるしではないでしょうか。  
それは、何はともあれ「組織を守ること」  
のようです。上層部、「偉い」とみなされ  
ている人の面子、権力、影響力のある人、  
つまり人の肩書を何より重んじることの  
しるしです。「隠したほうが人はつまづか  
ない」という考えのものと詭弁です。  
しかしその態度は何を現しているでしょ  
うか。「つまづき」そのものよりも「つま  
づきがばれること」を恐れているというこ  
とではないでしょうか。

二ところが教皇フランシスコの判断の  
基準は違います。

教皇は福音に基づいて考え、判断し、イ  
エスの真理の光のうちにキリストの  
共同体の生き方を見つめています。だか  
ら、教皇は絶えず、回心、改善、改革を呼  
びかけ、そして自分のためにも祈ることを  
願い求めています。

二まず自分自身、そして行橋・豊津にある  
イエス・キリストの私たちの共同体はそ  
の呼びかけに応えるための努力の大切さ  
を自覚し、その努力を惜しまないために共  
にまたお互いのために祈り、支え合いまし  
よう。

—福音の真理の光のうちに歩み、真理の  
光を証しすることによって、人々に仕え  
るイエス・キリストに相應しい共同体を  
築き上げるために—。